うるくの歴史と文化を語る会
会報 ガジャンビラ
第17号

発　行：うるくの歴史と文化を語る会
発行人：當間一郎　編集人：赤嶺和雄
〒901-0153
那覇市田原4-1-1 JAおきなわ小禄支店内
TEL. (098) 857-1175 FAX. (098) 852-1486

長嶺　弘善
大学非常勤講師
うるく歴文会会員

小禄尋常高等小学校の体操教育

戦前期沖縄の教育に携わる教師らで組織する沖縄県教育会は、研究誌『沖縄教育』を毎月発行していた。そこで2回ほど、小禄尋常高等小学校（通称「當間学校」だが「小禄尋高」とも称された）の教育を取り上げている。小禄尋高の他に個別に取り上げた例は見当たらず、小禄尋高で、時代の中で注目を浴びる教育がなされていた証左なのであろう。

まず、1935（昭和10）年11月『沖縄教育231号』の、「小禄尋高の運動会を観て」と題する署名（「A生」）記事である（58頁）。少し長いが、冒頭の一文が格調高い。

「十一月三日、空は澄んで、秋風にそよぐ伸びた甘蔗畑の向こうに美しい瀬長島を浮かべた海を見下ろす高台の上、優に百米のストレートコースが取れるこの広いグラウンドは、暑い夏休みに青年団と職員の労力奉仕によって出来上がったものだという」（適宜、読点を補い、漢字仮名遣いを改めた）。

そして、「磯に不断の花咲きて常盤の緑濃きところ」のメロディーに乗った優美な「校歌ダンス」があり、種目「非常時」は、「小禄平野の戦塵を衝いて少年義勇軍」の愛国義勇を描く。また「タンブリング」（組体操）は、「忽ちにしてピラミッド忽ちにして天の橋立、其の応用技巧の美しさは平素の基礎の確かさを物語る」という。57種目のプログラムは、未就学児や敬老演目があり、各字対抗競技もある。「一家一村を挙げて……我等の運動会」として、社会教育の中心としての役割を小禄尋高が果たしているという。

「小禄尋高の体育」（1937年『沖縄教育251号』巻頭）

「組体操・1940年頃」（『那覇市教育史 写真集』37頁）

次に、1937（昭和12）年7月『沖縄教育251号』である。目次頁の上半分で、「小禄尋高の体育」として写真紹介する、異例の扱いである。写真は不鮮明だが、どうやら、赤レンガ校舎前の運動場で、高学年児童が小さな台（箱）の上でバランス（平衡）をとっているようである。そして続く頁に、「小禄尋高体育表彰」の記事がある。「日本体操連盟から表彰された小禄尋常高等小学校の表彰伝達式は5月22日学務課において挙行、6月19日同校において祝賀式を行った」という。定期・不定期の健康相談や学校給食、「林間教授」や日光浴・海水浴などで、基礎体力養成が図られた。その上に、走投跳の体育テスト、球技走技投技跳技の競技会、体育教師を始め全職員による体育部組織・行事実施など、学校一丸となって体育に力を入れていた。

1929（昭和4）年の小禄尋高は、児童1,011人（21学級）・教員22人、校長は喜屋武清栄である（『沖縄教育178号』）。また、1938年（昭和13年）は、校長与那国善三となり、児童1,096人（22学級）・教員24人であり、1943（昭和18）年は、児童1,192人（25学級）・教員29人の国民学校である（『昭和13年学事関係職員録』『昭和18年学事関係職員録』、那覇歴史博物館蔵）。昭和13年に尋高校長となった与那国によれば、「前任者が村出身の喜屋武で12カ年も校長した」という（『わが回想録』113頁、県立図書館蔵）。すると、喜屋武清栄は昭和元年（1926年）4月から昭和13年3月まで校長職にあったことになる。小禄間切當間村出身の喜屋武は、明治24年（1891年）生まれであり（『小禄村誌』185頁）、35歳で母校・小禄尋高の校長に赴任したことになる。当然、4年後の小禄尋高創立50周年（1930年）に向けて全力を傾注したであろう。全校をまとめて記念行事を挙行し、更に体育教師をリードしつつ、全国的に認められるほど評価が高い体操教育を実践し続けた。そして全国表彰として結実したのである。

喜屋武清栄（『小禄村誌』）

「♪小禄第一国民学校の校歌を歌う集い」と同校校歌の主題について

平　良　徹　也

Ⅰ　小禄第一国民学校の校歌を歌う集い

2013年6月8日（土）午後2時30分（於　赤嶺自治会館）で「校歌ここに甦る一（小禄尋常高等小学校・小禄第一国民学校）校歌を歌う集い」が開かれた。当日の案内パンフレットの文面からその一部分を紹介すると、

♪校歌を歌う集い　2013年6月8日（土）午後2時
於　赤嶺自治会館
採譜ならびに構成編曲・演奏　長嶺　和子
企画　平良　徹也
運営協力　長嶺　弘善

沖縄県初の耐火レンガ造りのあの校舎も鉄の暴風と戦後の混乱の中で跡形もなく消え
それとともに校歌も失われて行きました
しかし校歌は生きていました　懐かしい日々の思い出とともに
私たちの心の中で生きていました
私たちの心の中で　いつか再び歌われることを願っていたのです
今日68年の時を越え　ここに甦ります

となっていて、同校校歌を共に歌う試みとしては、昭和19年の卒業式以来、68年振りの再現（とは言え戦後初）となることにその開催の意義を先ずは見出していた（但し、その他にも意図した所はあった訳で、追っ付けご理解いただける事と思う）。

開催に至った経緯はこうだ。「當間学校にも校歌があったってねー」と、昨年、字宮城の三月遊び調査後の資料集めから帰宅した直後の私。「どんな校歌だったのか、聞いてみたい」「上原節子（字大嶺出身・現在鏡原町在住）さんならまだ歌えるはず」との母との何気ない会話のやり取りから、その上原さんへ早速、問い合わせ。「歌えますよ」とのことで、「では歌声だけでも」と、歌詞のコピーを携えて、2013年5月25日上原さん宅を母とともに訪ね、聞き取りと歌の録音を実施。「伴奏があれば・・・もっと上手に歌えるのに・・」と、上原さんの感想の弁もあったことから、では譜面を準備して、誰かに伴奏してもらい、当時の仲間たちにも呼び掛けて一緒に歌って見ようと云うことに成って行った訳だが、戦争に破壊しつくされた小禄の事。譜面は何処をどう探しても見つけ出す事は出来なかった。そこで手間暇は掛るだろうが不可能な事ではないはずだと、この歌声のみの録音資料からの譜面の再現をと、と言う事を思い付き、小禄第一国民学校の御当地字赤嶺の長嶺弘善・長嶺和子の両氏に協力を求め、音声資料をベースに先ずは大雑把な形の試作譜面を書いて頂いた。これでどうにか仮の譜面が準備出来たと言う事になった次第であった。

そこで上原さん他同校卒業の有志（40年近く続く同級生模合の仲間）の皆さん方に歌唱の御協力をお願いして、仮の譜面を基に何度か試しに歌って頂き、元の形により近い形の譜面に修正を重ねて手書きながらも採譜再現譜として完成させ、次いでその採譜再現譜に基づいた合唱（電子オルガンの伴奏付き）をCDで記録保存をしようとの目的ももって集いの会が企画され、その通りに実行されたのであった。結果、楽譜とCDが齎されたと言う訳なのである。

なお長嶺和子氏には当日の演奏や楽譜の修正作業ばかりで無く、後日わざわざパソコン編集ソフトを購入されてまでもこの楽譜の完成には御尽力されていた事をここで是非紹介して置きたい（本会報にその楽譜を掲載）。

付記　歌唱でご協力頂いた皆さん：（出身字名）敬称略

新垣幸子（鏡水）　上原節子（大嶺）　金城かね（高良）　平良茂子（大嶺）　高良絹枝（大嶺）
當間八重子（安次嶺）　渡慶次よし子（高良）　真境名キク（具志）　特別参加・上原多美子（垣花）

Ⅱ　同校校歌の主題について

小禄第一国民学校（小禄尋常高等小学校）校歌　　作詞・作曲：不明

一　磯に不断の花咲きて
常盤の緑濃き所
聳ゆる甍揺るぎなし
これぞ我らが学びの舎
学びの園に睦みつつ
勤しみ摘まむ教え草

二　古城のかなた雲晴れて
昇る朝日の勇ましく
瀬長の浦に丹ほう時
君と親とに仕えなむ
尊き誓い固めつつ
鍛え練りてむ身と心

三　世界に富を求むるも
御先祖の地に鍬取るも
盡くすは同じ誠なり
自立進取の意気をもて
栄ゆる御代に遅れざる
強き御民と我ならむ

校歌にはその学校の建学の理念や校風、地域の風土や歴史などが象徴的に盛り込まれるものであると言う。三節から成る本歌にも当然その事は言える事であって、忘れられ歌われなくなってしまった今日であっても、失われた過去の歴史や当時の状況を問い直すためには、本歌に託された意味あいを歌詞の上から検証して見る事もまた十分に意義深い事だと考えているものである。

本歌は三節からなっている。三節までを通してその内容を比喩的に表現するのであれば、入学から日々の鍛錬、修学、卒業、出世へと至る階梯を歌唱者自身が上がって行く成長物語となるような構成法を取っている。

各節ごとの主題としては、一節では風土の中の教育、二節では時間と身体、三節では御民（みたみ）我らと自立進取の道が手際よく盛り込まれている。そして本歌を貫く伏線的な第二の主題が「海の民　琉球」の喚起にあるだろう事も窺えるものである。この事は最後に述べるつもりなので、先ず各節ごとから見て行くことにしよう。各節とも、大景から小景へと焦点を絞り込ませ主題を明確に提示する手法が取られている。

第一節　風土の中の教育

不断の花とは、絶える事無く年から年中咲き続け、次々と咲き移って行く野の花のことではあるが、この場合の”磯”にと置かれた冒頭の一句がある事によって、小禄半島とかつては呼ばれたこの地域を、青く輝く海のキャンバスの上に寄せては返す波の花のように白く縁取ったかのようにも思わせるものがある。その不断の花に縁取られる小禄半島の中央部、緑濃き赤嶺の台地の上に光を放って建つ校舎、威風堂々と建つ校舎。そこで施される近代学校教育に瞳を輝かせ通って来る生徒たち、と言う具合に歌詞は展開されて行く。そこでしっかりと学ぼうと言う事だ。小禄半島を大キャンバスに見立てて赤嶺の地へ、大景から小景へと焦点を絞り込み、緑豊かな風土の中での近代学校教育の薫陶をとの願いがはっきりと込められている事が見えて来る。このように第一節は、学校に集う生徒たちの歓声が、今にも聞こえて来そうな気配に満たされた一節に仕上げられているのではないだろうか。

第二節　時間と身体

本歌が何時作られたのか、現在では不明と言うことにはなってはいるが、恐らくこの謡い出しの古城とは、鎌倉芳太郎や伊藤忠太らの尽力で取り壊しの難を逃れ、今そこに有ることの価値を見直された首里城の事だと考えて良いものである。そしてこのことから、本歌は大正十三(1924)年ごろに制作されたのではと考えているものだが、その事の検証は別の機会に譲る事にして、本題に立ち戻る。【注　レンガ校舎となったのが、大正十二（1923年】

小禄地域から見ると、首里の台地は小禄半島の東方に聳え、日々に太陽を押し出す聖なる方位にあると言う事になる。首里城はその首里の台地上の更に高所に聳え、かつての琉球王国の悠久の歴史を湛えて佇んでいたのであって、明治の琉球処分によっても沖縄人の精神の奥処からは消し去ることが出来なかったものである。

その首里城を第二節は冒頭部の歌い出しに置き、朝、首里の台地から天空へと駆け上がった太陽が時を移して何時しか西へと傾き、瀬長島や慶良間の島々を真っ赤に染めながら一日を閉ざして行くさまを視覚的に謡い上げている。朝（あした）から夕べへの日の移ろいから、一日の時間の経過を強く意識させ、時間を大切にせよとの概念が強く打ち出されていると言えるものであろう。

とは言えその瀬長島は小禄地域の人々にとっては、瀬長ムヌメーの御願行事が現在でも行われるような、神話と信仰上の聖地ともなっていることから、次のようにも解するべきだろうとも思われて来る。

その寓意は神話と信仰上の聖地瀬長島から歴史上の中心首里城へと視点を移動させ、神話的な時間から歴史的な時間への身体の移動を意識させる。そして東方の首里城から西方の瀬長島へと太陽の場を移動させ、歴史的な時間から現在の時間へと生身の時間の流れの中にある身体を再び意識させる。つまり現在と言う時間が、神話や歴史という観念上の時間の枠組みの中にあることを納得させた上で、過去の人間の身体が延々と紡いで来たであろう系譜の線上に今の私たちの身体が有ることの意味あいを意識させているのである。その上で現在の私たちの身体に求められる行動倫理、それこそが、親あっての子、御先祖あっての私たちであると云うような親父祖（ウヤファーフジ）への報恩の法すなわち忠孝の実践だとしているのである。そのために健全な精神と健康な体に練り上げて行く必要があるのだとこの節は強調している。

第三節　御民我らと自立進取の道

第三節には到達すべき目標が掲げられている。誠を尽くし自立進取の気概を以て責務を果たすべく、栄えある帝国の御民として世に出て行く、との決意が掲げられている。これらを更に要約して言うならば、学校教育を通して成長して行く中で御民としての我らを自覚せよと言う事になるものと思う。
具体的に見て行こう。

世界に富を求めるとは、当時の国是とも言うべき海外雄飛を象徴した言葉で、この校歌が制作された頃の時代の雰囲気を一方では良く伝えている。フィリピンやマレーシア或は南洋、ハワイや北米、南米などへの移民や出稼ぎなどを奨励したもので、海外に活路を求める気概を示し、発展して止まない国威をある意味では示したものとなっている。そしてそれを受けて、御先祖の土に鍬を取るとは、国家やムラの基本をなす家制度の維持継続が国内にあってはより重要で、それをしっかりと貫徹すべきだとしているのである。その上で、国内にあって家の継続を担う者と海外にあって国威を発揚する者とに制度上の差が顕著であった当時にあって、国内国外を問わず、場は異なるもののその事に当たるそれぞれの場で、二心無く一心に誠を尽くせとしているのである。

後段は前段に至る方法だと読み解く事が可能なようだ。それぞれがその身の置かれたそれぞれの場で、自立進取の心を前面に誠を尽くして生きる、それが御民我らの本来のあるべき姿なのだとして、卒業して後の道筋をも提示して結んでいる。

まとめ

本歌には、君と親・御先祖・誠・御代・御民などの語彙が目立ってあることから、「教育勅語」の影響が事実としてあった事が良く理解できる。「一旦緩急アラハ義勇公ニ奉シ・・・」が「教育勅語」の究極の到達目標であった事に対して、本歌は御民われらとして覚醒して行く事でそれに呼応したのではと考えさせるものがある。また全節に盛り込まれた歌の内容から判断して、ごく普通の小学生の知識ではその真意が十分に理解されたとはとても言い難いものを感じざるを得ないものでもあったが、テンポ良く繰り出される歌節がその趣旨を生徒らの体内に行き渡らせて行った事もまた事実としてはある訳で、それは本歌が当時称揚された「われは海の子」の影響などを受けたものだったからか、と考えているところである。

文部省唱歌（1910。明治43年）「われは海の子」には、心身を鍛練して海辺の小村から世界へ打って出る少年の成長の軌跡がテンポ良く示されていて、発表直後から全国的な評判を呼んでいた。その「われは海の子」の3番の「高く鼻つくいその香に不断の花のかをりあり・・・」や7番「いで大船を乗出して我は拾はん海の富　・・・」などの歌詞中に見える”磯”” 不断の花”” 海の富”などの各語彙が本歌にも象徴的に見いだされると言う所から『「海の民　琉球」の喚起もあったのでは』と推量したもので、勿論今後検証されねばならないものである。

また他に小禄地域内の他校や戦後の新設校などとの相互比較を通して小禄地域校歌変遷史なども検討される必要があるべきだが、その何れの事柄も今後の課題として積み残す結果となってしまった。

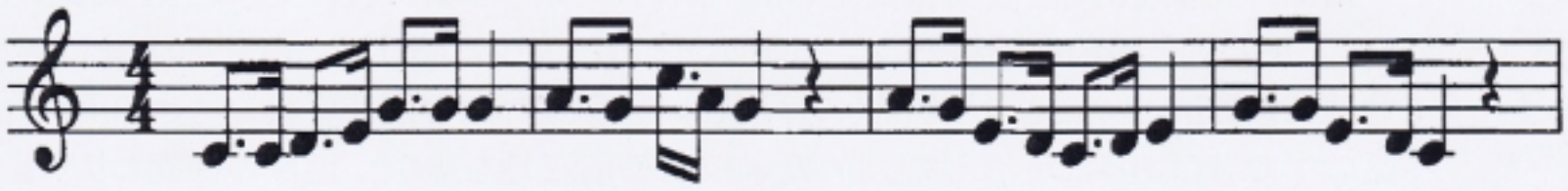
― 小禄尋常高等小学校 ―

小禄第一国民学校校歌（再現譜）

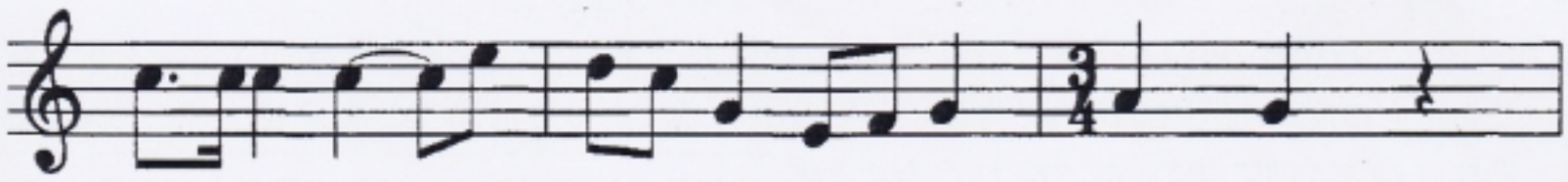
作詞・作曲　不明

採譜・構成・編曲　長嶺　和子

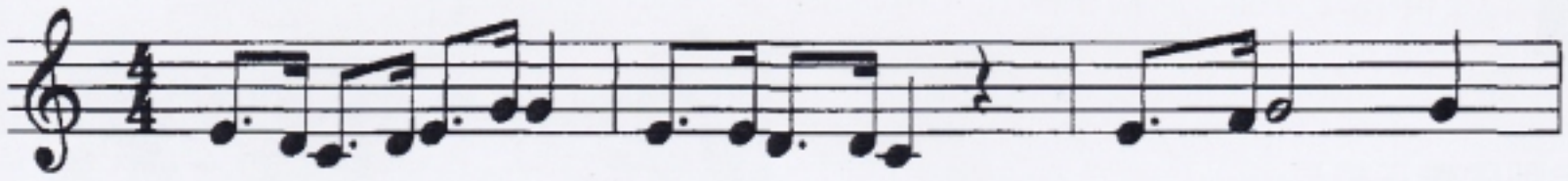
（2013, 06, 08）



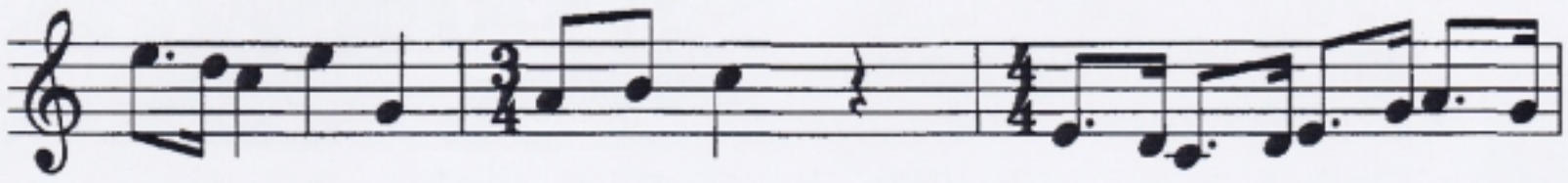
いそに ふだんの　はな さきて　　ときわ のみどり　こ きと ころ



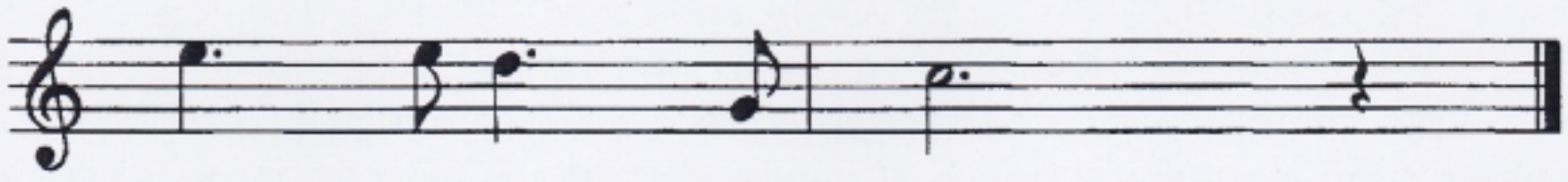
そ びゆ る ーい　ら ー か ゆ る ぎ　　な　し



こ れぞ われ らが　ま なび のや　　ま なび　の



そ のに む つ　み つ つ　　い そし みつ ーま ん



お　　しえ　　ぐ　さ

一　磯に不断の花咲きて（いそ ふだん）
常盤の緑濃き所（ときわ）
聳ゆる 甍 揺るぎなし（そび いらか）
これぞ我らが学びの舎
学びの園に睦みつつ
勤しみ摘まむ教え草（いそ）

二　古城のかなた雲晴れて（こじょう）
昇る朝日の勇ましく
瀬長の浦に丹ほう時（せなが に）
君と親とに仕えなむ
尊き誓い固めつつ（とうと）
鍛え練りてむ身と心（きた ね）

三　世界に富を求むるも
御先祖の地に鍬取るも（みおや つち）
盡くすは同じ誠なり（つく まこと）
自立進取の意気をもて
栄ゆる御代に遅れざる（さか みよ）
強き御民と我ならむ（みたみ）

※本譜は同校昭和19年卒業の有志による「校歌ここに甦る」と題して実施した同校校歌を歌う集い（2013年6月8日於赤嶺自治会館）での録音も参考にして長嶺和子氏が採譜、再現した再構成譜である。（なお現在まで、同校校歌の楽譜の原本は未発見である）　注記・平良徹也

与那国善三をとおして地域を見つめる

小禄尋常高等小学校（小禄第一国民学校）最後の校長について

長嶺　和子
元松川小学校長
うるく歴文会会員

【はじめに】

旧知の先輩である島袋文雄先生（元小学校長）は、『那覇市教育史』の主任編纂員として活躍された。失われた戦前の資料を、どこに何があるのか先生に聞けばたいていのことは解決するから、勉強にもなるし昔のことなどを聞くのは面白いと感じて、たびたび資料を見せて頂いたりしていた。話の中で昔はあったが消えてしまった学校名や所在地を繙くと、地域の様変わりや昔の人々の暮らしぶりが偲ばれ、特に金城小学校・さつき小学校地域は戦前と戦後で激変しているうえに、焼失した学校のことは個人の所有する写真を手掛かりに僅かに様子を推し量ることしかできないと知らされた。そこで、資料を探して確かめてみたくなり与那国善三（山城善三）校長について調べてみることにした。

本原稿は、昭和54年（1979年）5月15日発行の『わが回想録』（非売品）にほとんどを負っていることをまずお断りしたい。

この本を自宅に持っておられる方は、先生の出身地である竹富島での胸像建立にご芳志をされた方々であり、『禄友会』に関わっておられた方だと思われる。私は県立図書館からお借りして繙いたが、35年前出版直後この本を手にした記憶を頼りに、今回の原稿資料として用いることができた。

小禄第一国民学校昭和17年卒業記念（『高良の字誌』363頁）
中央の上半身が写っている人物が当時46歳の与那国善三校長（筆者）

当間学校と与那国善三校長

回想録出版（昭和54年）83歳の山城善三先生（昭和33年、与那国から山城に改姓）

学校創立明治13年（1880）の小禄小学校（小禄番所内）を引き継いだ小禄尋常小学校（後に小禄尋常高等小学校～小禄第一国民学校：通称当間学校）は、大正12年（1923）に赤レンガ造りの校舎へと改築された。昭和13年（1938）に赴任した校長が、与那国善三校長である。沖縄県初の「レンガ造りの当間学校」に変わって15年経った当時、県下に知れ亘った学校に宮古支庁での県視学から校長として赴任した与那国善三は、時代背景や土地柄、さらに本人の経歴や人柄から、最高水準の学校経営を目指して経営に当たったことと推測する。当間学校の最後の校長となる昭和19年8月の依願退職まで6年5か月に亘って勤めた。当間学校に関して残念ながら詳細はつかめない。しかし、研究に熱心な校長の下で、地域の課題とともに時代を的確に捉えた学校の教育活動が展開されたことだと推測できる。豊かな土地柄と立派な校舎に象徴される当時の学校、与那国善三はここを退職後、長年の念願だった郷土史の研究に力を注ぐこととなる。

全国退職女性校長会誌『みずわ第7号』

年表（昭和十五年度～二十六年度）

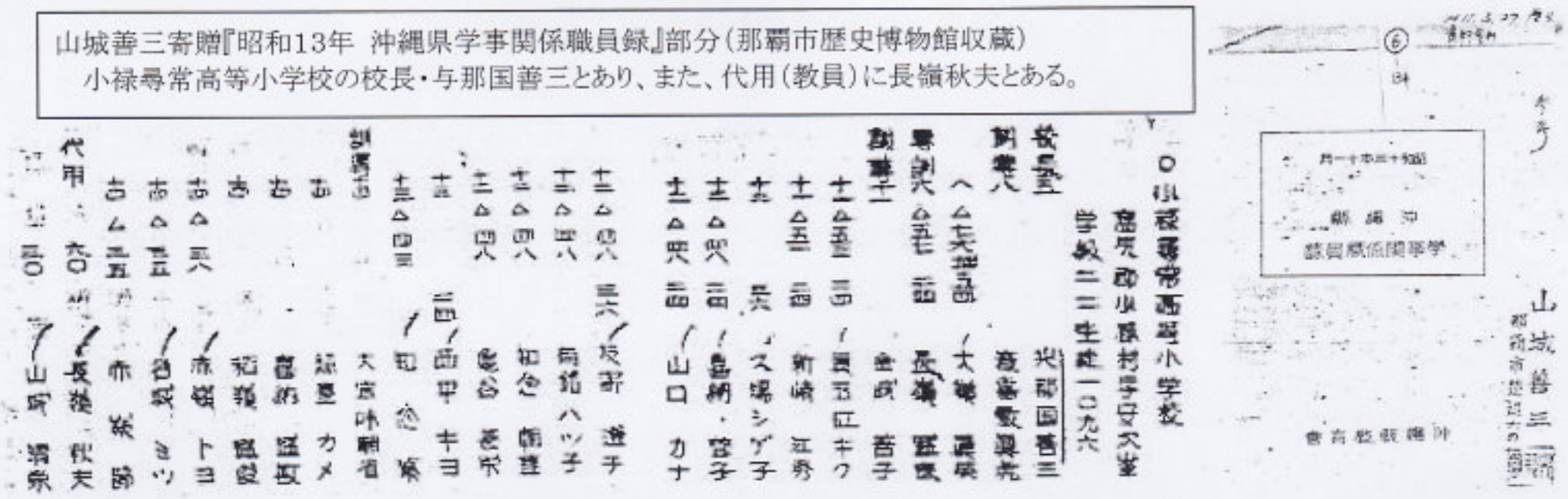
	事項（教育事項は太字）
昭和15年度	
9・27	日独伊三国同盟成立
11・10	紀元2600年式典挙行
3・1	「国民学校令」公布（「小学校令」を改定）
昭和16年度	
8・8	**学校単位に学校報国隊の編成を勅令**
12・8	太平洋戦争起こる（英米に宣戦布告）
12・19	言論・出版・集会・結社等臨時取締法公布
1・9	**国民勤労報国協力令施行規則に基づく学徒動員命令出る**
昭和17年度	
4・18	米陸軍機　日本本土初空襲
1・21	**「中学校令」を公布（修業年限4年・教科書を国定とする）＊　各学校令を改定**
昭和18年度	
9・22	25歳未満の未婚女子を女子勤労挺身隊として動員決定
10・2	**学生生徒の徴兵猶予停止（文科系学生の一斉入営）**
12・1	**学徒兵入営**
12・24	徴兵適齢一年引下げ
1・10	**国民学校教育の戦時非常措置について通達**
1・29	防空法による疎開命令発令
昭和19年度	
4・1	旅行を制限（旅行証明書発行、特急・寝台等廃止）
4・28	**決戦非常措置要綱に基づく学校工場化実施について通達**
6・15	米軍サイパン島に上陸開始
6・30	**国民学校初等科児童の疎開促進について閣議決定**
7・8	**学徒動労動員に伴う軍事教育の実施について通達**
8・14	**工場・事業場への中学校低学年生徒及び国民学校高等科児童の勤労動員について通達**

与那国善三　先生　　教職略歴

大正7年	具志川小学校	訓導（5か月）
大正8年	師範学校付属小学校	訓導（4年半）
大正12年	大阪市堀江小学校	訓導（1年半）
大正14年	大阪市曾根崎小学校	訓導（8か月）
大正15年	甲辰小学校	訓導（1年）
昭和2年	横浜市立潮田小学校	研究訓導（1年）
昭和3年	久茂地小学校	教頭（2年5か月）
昭和5年	松山小学校	教頭（1年）
昭和6年	甲辰小学校	教頭（2年）
昭和9年	泊小学校	教頭（2か月）
昭和9年	越来小学校	校長（1年5か月）
昭和11年	沖縄県宮古支庁	視学（2年）
昭和13年	小禄尋常高等小学校（昭和15年より、小禄第一国民学校）	校長（6年5か月）
昭和19年	8月依願退職	

訓導15年　校長11年　県視学2年
満28年間に及ぶ教職生活

山城善三寄贈『昭和13年 沖縄県学事関係職員録』部分（那覇市歴史博物館収蔵）
小禄尋常高等小学校の校長・与那国善三とあり、また、代用（教員）に長嶺秋夫とある。



山城善三先生の胸像（竹富島、昭和49年5月18日建立）

胸像建立除幕式における　石堂 博一氏　祝辞

「山城善三先生の御偉業を称える」

[や]八重山の初代頭職西塘生誕の地蔵元創設の竹富島生れ
資性温厚人格円満頭脳明晰の師範卒業当年七十七

[ま]真面目と優秀を買われ母校付属訓導より累進小学校長
県視学等を歴任し教育界に献身特に郷土研究も精進

[し]終戦で帰郷区長から八重山民政府土木産業部長に抜擢
また公選初代竹富町長に当選離島の福祉繁栄に努力

[ろ]論より証拠の実践家で沖縄遺族連合会沖退公連沖縄
観光協会を創立し専務理事や幹事等の要職で永年尽す

[ぜん]全琉の観光事業発展の功績で運輸大臣賞日本観光協会
長賞を受賞観光案内手引には英和文その他多種発行

[ぞ]造詣の深さから文化財保護委員長県史編纂審議会副
委員長博物館運営公園審議の役職担い著書十指に及ぶ

[う]受けられた勲五等双光旭日章の光栄と偉業顕彰に胸像
建立伝記御出版は久子夫人の内助の功と郷土の誇り

禄友会との親交記録

禄友会は、「小禄国民学校（与那国善三校長時代昭和13年～19年）の職員で第二次世界大戦の生存者をもって組織した親睦会」である。始め校歌の“常盤のみどり…”をとって「常盤会」としたが、後で小禄の禄をとって「禄友会」と改称したという（『わが回想録』333頁）。昭和29年の設立会員43名で、山城善三に続き、長嶺秋夫（立法院副議長）の名がある。24年後の昭和53年末で34名の会員が掲載されている。

戦中に台湾時代を経て戦後の郷里での要職から、再び那覇に戻ると、沖縄遺族連合会、沖縄観光協会、退公連など、次々に組織を立ち上げ沖縄の戦後復興に手腕を発揮することとなる。彼の教職歴で最も長い期間在職したのが当間学校であり、その後の終の棲家は住宅公社山下マンションで、政界や財界に活躍する地域輩出の諸氏との交流を楽しみつつ、多くの仕事を成し遂げて高層から地域を見守って生涯を閉じたのである。

胸像建立除幕式における挨拶
禄友会幹事長　知念　繁

本日ここに山城善三先生の胸像除幕式並びに祝賀会が催されるに当り、わざわざ招待にあずかり、かつまたお祝いのあいさつを述べさせていただきますことは誠にありがたくこの上もない光栄に存じます。先ほど司会の方から日本から来られたとのご紹介がありましたが、なるほどウルクンニッポンの禄友会から代表として参ったからでありましょう。それでは、禄友会のことについて一言お話申し上げたいと思います。山城先生は、戦後のきびしい情勢の中にありながら元の部下職員の身を案じ、その消息を訪ねて親しく機会あるごとに激励をされるなどしていつもみんなのことを考えてこられました。われわれは、先生のこうしたありがたいお気持ちに感動して先生を中心に集をもつことになり、先生が旧小禄第1国民学校長時代の部下職員で、禄友会を作って今日に至っているのでありまして、名前も小禄の禄をとって名づけてあります。…以下省略…

【終わりに】

当間学校の最後の校長のことを書くこととなった経緯について少し触れたい。私には母の異父姉である伯母が山下マンションに住んでいた。多少の行き来があった中で同居する隣の部屋の山城善三翁を正面から紹介されたことはなかった。祖母のことを聞かされる度に、伯母が生まれた頃、女性としてどのような人生を歩んだのか知りたかった。島では初の師範学校へ進学を果たした男児に、家族をはじめ多くの支えが当たり前だった時代、祖母は八重山上布の織手として出世の望みを師範学校に学ぶ与那国善三に託して島に暮らした。卒業と同時に子をもうけ、その後二人目の子をもうけたが祖母は島での生活を続けた。善三は新しい妻と向学に燃え大志を抱いて大阪や横浜へと羽ばたいた。善三の生き様や郷里への思いを綴った回想録から、隠れた祖母の存在を窺うことができる。不思議なことに当間学校がここ赤嶺の地にあったことが、善三と、祖母と私とを繋げていることを母に報告したい。

小禄尋常高等小学校【当間学校・小禄第一国民学校】

写真提供：五十嵐熙さん

1936(昭11)年～40(昭15)年まで、那覇の先原崎(現在の那覇空港近く)に住んでいた東京在住の五十嵐熙さん。

1932(昭7)年千葉県生まれ。垣花尋常小学校に通う。

灯台守をしていた父の八郎(明37年生)さんが趣味で撮っていた写真を沖縄県立博物館へ寄贈した中の4枚。

▲運動会で組体操（タンブリング）をする児童たち。左上に瀬長島が見える。（提供：五十嵐さん）

▲運動会で造り花を手に校歌ダンスを踊る女子児童。（提供：五十嵐さん）

「♪・・・瀬長の浦に丹ほう時・・・♪」

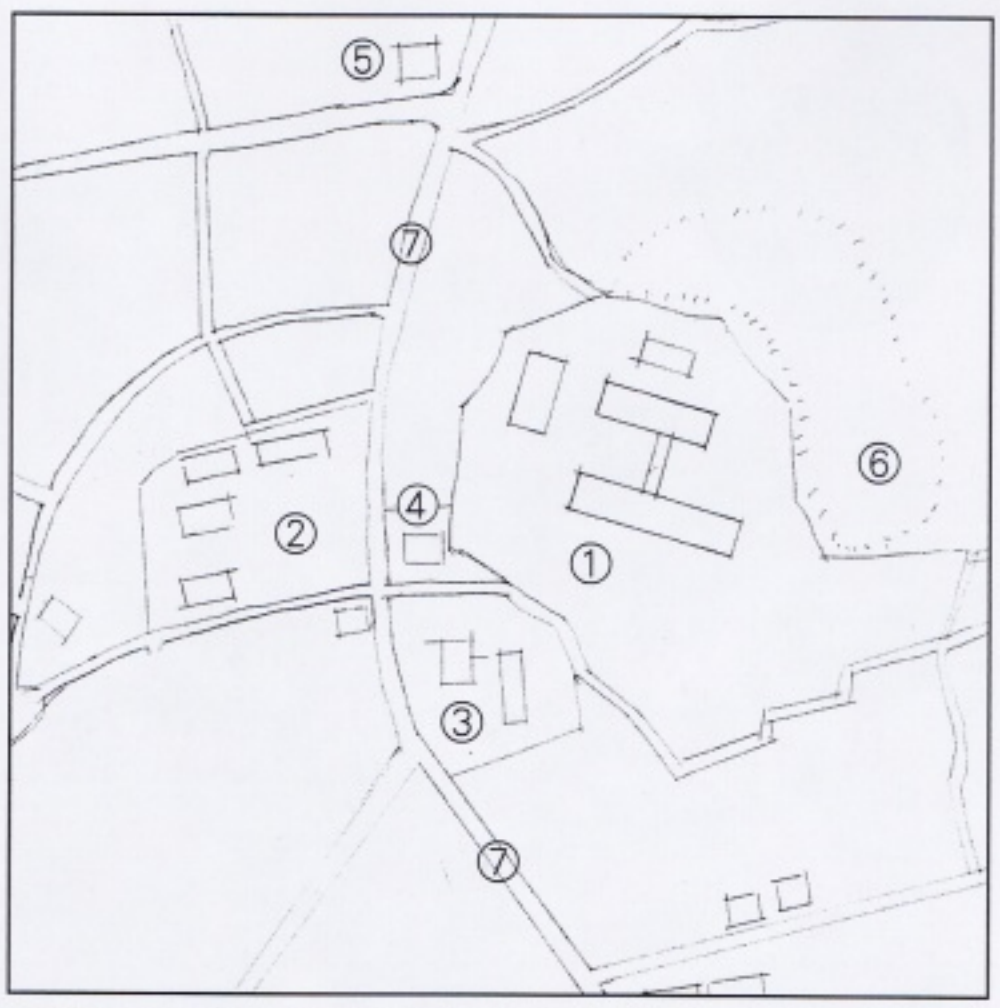
▲運動会で応援する家族(提供：五十嵐さん)

▲1923(大正12)年に沖縄初の赤レンガ造りの校舎へ改築される。
(写真の撮影年は不明)

▲レンガ造りの壁をバックに(提供：五十嵐さん)

▲小禄尋常高等小学校（当間学校）－創立五十周年記念－ 昭和5年（1930年）。
屋根中央部には桜の校章か？（円内）

小禄尋常小学校明治13年（1880）島尻郡内では早い時期に創設された。左上に瀬長島が見える（明治34年頃）。明治・大正・昭和沖縄県学校写真帳（那覇出版社・昭和63年発行）



左側航空写真：昭和20年2月28日米軍撮影（沖縄県公文書館）。右側見取り図：①小禄第一尋常小学校（当間学校）レンガ造り校舎。②工芸補習学校。③小禄村役場。④診療所。⑤小禄郵便局。⑥ガンジバラー（ガッコー毛）。⑦糸満県道（現331号線）コンクリート敷設。